

枳^き実^{じつ}と忌日（三）

西をさむ

芭蕉去りてそののちいまだ年くれず 蕪村

与謝蕪村は、芭蕉が去ってから百年もの歳月が流れたのに、未だ俳諧を理解出来ていない自分を嘆いているのです。でも芭蕉が踏み込めなかった諧謔を手に入れたのです。例えば、

逢ぬ恋おもひ切る夜やふくと汁 蕪村

死ぬ気など毛頭ないので、ふぐ汁を食べても絶対中りません。

追剥に禪もらふ寒さ哉 蕪村

追剥もさすがにこの寒さではと気の毒に思ったのでしょうか。禪だけは返してくれたのですが、尻の突っ張りにもなりません。

ところで皆さんは「権兵衛狸」と言う落語をご存知でしょうか。毎晩、権兵衛さんの家の戸を「権兵衛、権兵衛」と誰かが叩きに來ます。でも戸を開けても誰もいません。権兵衛さんは、狸の仕業に違いないと、ある晩、戸口で待っていました。名前を呼んで戸を叩く音がしたので素早く戸を開けたところ、やっぱり狸が転がり込んで來たのです。ここで問題です。狸は身体の中のどの部分で戸を叩いていたのでしょうか。お凸でしょうか、尻尾でしょうか。答えは背中でした。皆さんも後ろには気を付けてください。

戸をたたく狸と秋をおしみけり 蕪村

蕪村は文人画でも卓越していました。でも奥方をモデルとした画は無いと思います。人前に奥方を晒す訳がありません。その情愛が滲み出ているのが次の句です。

腰ぬけの妻うつくしき火燧哉 蕪村

蕪村は一七八三年、陰曆十二月二十五日、六十八歳で俳諧中興の途、次世代にその意志を預けました。それを受け継いだのが、正岡子規

です。明治三十年十二月二十四日、根岸の子規庵で実証したのです。

蕪村忌に会して終に年忘 子規

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺 子規

鐘つけば銀杏ちるなり建長寺 漱石

さて、法隆寺と建長寺の句はどっちが先に詠まれたのでしょうか。漱石は子規に批評してもらう為に沢山の句を子規に送っています。如何やら建長寺が先だった様です。其れはさておき、漱石の初期の句です。

骸骨や是も美人のなれの果 明治二十四年

何か漱石の人生を予感させられませんか。

能もなき教師とならんあら涼し 三十六年

これは、正岡子規が世を去って一年後の作品です。そうして、漱石は、後に文豪と呼ばれる様になるのです。

雷の囀にのりすぎて落ちにけり 四十年

と言うユーモラスな句もあります。

骨許りになりて案山子の浮世かな 四十三年

秋風やひびの入りたる胃の袋 同

一九一六年十二月九日、夏目漱石没。

我輩は薬師ではないが、此の時、枳実を煎じて飲んでいたら、少しは永らえていたのではないかと思います。